

欧州危機からアジア危機へ

銀行危機がもたらすのは信用の収縮である。資産の劣化が自己資本の毀損を招き、銀行の貸し出し能力を落としていくからだ。この信用の収縮を通じて不況が促進され、貸し出しや投資などの銀行資産の劣化が一段と進む、という悪循環を生み出すのである。

欧州危機で最大のものは銀行危機である。南欧諸国に信用供与した銀行の問題である。欧州の銀行の構造的な弱点は、グローバルイゼーションの下で、米国の銀行と競うためにバランスシートを急拡大したことである。国内の貸し出しと預金の市場規模が米国と比べて圧倒的に小さいにもかかわらず、米国並みの規模を目指したために、資産面では対外投融資を、負債面では市場調達のエイトを大きく引き上げてしまった。銀行によっては負債の7割程度を市場調達に依存している。

銀行危機は市場調達に頼る欧州の銀行を直撃する。市場から資金が調達できなければ、資産の削減を進めるより方策はない。「貸しはがし」である。この最大の犠牲者はアジアを中心とする途上国である。リーマン・ショック後の2008年末から11年3月末にかけて、欧州の銀行は先進国向け投融資を1.8兆ドル（うち南欧5ヶ国向けで7600億ドル）減らしたが、逆に途上国向けは6100億ドル増やした。日本を除く主要アジア10カ国向けの投融資残高で見ても、欧州の銀行が1.4兆ドルと米国の4500億ドル、日本の3100億ドルに比べて圧倒的に大きい。

アジア経済の問題は、米欧の景気減速に伴い、輸出の減少と貿易黒字の縮小が進展するなかで、資本の流出が加速しようとしていることだ。中国をはじめとする賃金の高騰も、多国籍企業の直接投資を鈍らせている。アジアの高成長を支えてきた条件がことごとく逆回転し始めているのだ。アジアの時代ではなく、アジアの危機が始まろうとしている。国も企業も対外戦略の再検討が求められている。

(2011年10月21日 十字路)